



国際平和活動の理論と実践 ——南スーダンにおける試練——

井上美佳・川口智恵・田中〔坂部〕有佳子・山本慎一 編著

京都 法律文化社 2020年 xvii+165p.

本書の表題に掲げられた「国際平和活動」とは、武力紛争の解決や紛争後の平和構築を目指し国際社会の諸アクターが取り組む諸活動を指す概念であり、平和維持活動（PKO）はその代表的な活動のひとつである。歴史的に深刻な紛争禍を経験し、現在なおその課題に直面するアフリカの国々にとり、国際平和活動は、国際的な枠組みのもとで紛争に対処しようとする際のもっとも重要なアリーナとなる。そこでは、アフリカの諸アクターとアフリカ域外の諸アクターが緊張関係をはらみながらも協働し、複合的な危機の展開過程に即応して、対策や介入を行う。この意味で国際平和活動は、紛争をとりまく広い事象の一部をなしているのであり、紛争のダイナミズムを理解するうえでも、国際平和活動に関する基本的な知識を持つことはきわめて重要といえる。

そのような知的要請に答えてくれるのが本書である。本書で読者は、国際平和活動の概念や歴史を総括的に掴み、かつ主要なディシプリンの立場から理論的に掘り下げることができる。取り上げられているディシプリンは、国際法学、政治学（制度論）、国際組織研究、政策研究と多面的である。編著者の間では、PKOの多機能化とともに喫緊の度を増す、外交、開発、防衛、人道の諸側面の調整をどのように実現するかという問題意識が共有されている。この実践的課題が明示されていることで、理論的な記述も理解しやすい。すべての章が南スーダンを共通の事例として取り上げている点も特色である。それを通して、国際平和活動をめぐる議論に与えたインパクトという点から南スーダンの紛争のひとつの側面が浮かび上がるところも本書の読みどころである。

本書は、研究志望者への手引き書であり、かつ研究書だとまえがきで編者は言う。紛争そのものが日々予想もしない展開をとるため、国際平和活動も常なる練り直しと再編が求められよう。活動現場との応答は研究をアップデートする際にとりわけ重要だろう。蓄積された経験・知見を次世代の人材に継承していくことも求められよう。手引き書かつ研究書というスタイルは、この研究課題ならではの事情に即した的確な編集方針と感じられた。またこの編集方針は、同時代の実践的課題を扱う際の研究成果のあり方を考えるうえでも参考にできそうである。ていねいに編集された良書としてお勧めしたい。

佐藤 章（さとう・あきら／アジア経済研究所）

